

## Fourier 変換を用いた波動方程式の解の導出 Derivation of the Solution to the Wave Equation using the Fourier Transform

○金子侑馬<sup>1</sup>  
\*Yuma Kaneko<sup>1</sup>

Abstract: In this talk, we derive solutions to the initial value problem for the  $n$ -dimensional wave equation using the Fourier transform. After obtaining a general formula valid in any dimension, we carry out explicit computations in the case  $n = 3$  to obtain a more concrete representation of the solution.

### 1. 定義と命題

本講演では  $n$  次元波動方程式

$$\frac{\partial^2 u}{\partial t^2}(x, t) = \Delta u(x, t), \quad \Delta u(x, t) = \sum_{j=1}^n \frac{\partial^2 u}{\partial x_j^2}$$

の初期値問題の解を Fourier 変換を用いて導出を行う。

ここで初期条件は

$$u(x, 0) = f(x), \quad \frac{\partial u}{\partial t}(x, 0) = g(x)$$

としている。

まず、いくつかの定義と命題を与える。

$n$  個の非負整数の組  $\alpha = (\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n)$  を多重指数と呼ぶ。ここで、多重指数  $\alpha$  に対し、 $x^\alpha, \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha f$  をそれぞれ

$$x^\alpha = x_1^{\alpha_1} x_2^{\alpha_2} \cdots x_n^{\alpha_n}, \quad \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha f = \frac{\partial^{|\alpha|} f}{\partial x_1^{\alpha_1} \cdots \partial x_n^{\alpha_n}}$$

$$|\alpha| = \alpha_1 + \alpha_2 + \cdots + \alpha_n$$

と定義する。次に、急減少関数の空間  $S(\mathbb{R}^n)$  を以下で定義する。

$$S(\mathbb{R}^n) = \left\{ f : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{C} \left| \begin{array}{l} f \text{ は } C^\infty \text{ 級で, 任意の多重指数} \\ \alpha, \beta \text{ に対し, } x^\alpha \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\beta f \text{ は有界} \end{array} \right. \right\}$$

さらに、 $f \in S(\mathbb{R}^n)$  における Fourier 変換を

$$\widehat{f}(\xi) = \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{n}{2}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-i\langle \xi, x \rangle} f(x) dx \quad (\xi \in \mathbb{R}^n)$$

$$\langle \xi, x \rangle = \xi_1 x_1 + \cdots + \xi_n x_n$$

と定義する。

**命題 1.**  $f \in S(\mathbb{R}^n)$  とする。このとき任意の多重指数  $\alpha$  に対し次が成立する。

$$\left(\left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha f\right)^\wedge(\xi) = (i\xi)^\alpha \widehat{f}(\xi)$$

**命題 2.**  $f \in S(\mathbb{R}^n)$  とする。このとき次が成立する。

$$(1) \quad \widehat{f}(\xi) \in S(\mathbb{R}^n)$$

$$(2) \quad \int_{\mathbb{R}^n} |f(x)| dx < \infty$$

$$(3) \quad \int_{\mathbb{R}^n} |f(x)|^2 dx < \infty$$

**命題 3.**  $f \in S(\mathbb{R}^n)$  とする。このとき次が成立する。

$$(1) \text{ 反転公式} \quad f(x) = \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{n}{2}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{i\langle \xi, x \rangle} \widehat{f}(\xi) d\xi$$

$$(2) \text{ Plancherel の定理} \quad \int_{\mathbb{R}^n} |f(x)|^2 dx = \int_{\mathbb{R}^n} |\widehat{f}(\xi)|^2 d\xi$$

### 2. $n$ 次元波動方程式の解

まずは、 $n$  次元波動方程式の解を導出する。 $u$  を波動方程式の解とし、 $f, g \in S(\mathbb{R}^n)$  とする。

$$\frac{\partial^2 u}{\partial t^2}(x, t) = \Delta u(x, t)$$

に対し、 $x$  について Fourier 変換

$$\widehat{u}(\xi, t) = \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{n}{2}} \int_{\mathbb{R}^n} e^{-i\langle \xi, x \rangle} u(x, t) dx$$

を形式的に行うと

$$\frac{\partial^2 \widehat{u}}{\partial t^2}(\xi, t) = -|\xi|^2 \widehat{u}(\xi, t)$$

となる。このとき、初期値に対しても同様の操作を行うと  $\widehat{u}(\xi, 0) = \widehat{f}(\xi), \frac{\partial \widehat{u}}{\partial t}(\xi, 0) = \widehat{g}(\xi)$  が得られる。

ここで各  $\xi \in \mathbb{R}^n$  を固定すると上式は  $t$  についての常微分方程式となり、解は

$$\widehat{u}(\xi, t) = \widehat{f}(\xi) \cos t|\xi| + \widehat{g}(\xi) \frac{\sin t|\xi|}{|\xi|}$$

となる。

$\hat{u}$  に対し、反転公式を適用すれば、次の公式を得る。

**定理 4.  $n$  次元波動方程式の解の公式**

$f, g \in S(\mathbb{R}^n)$  とする。このとき、 $n$  次元波動方程式の初期値問題の解  $u(x, t)$  は次のようになる。

$$u(x, t) = \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{n}{2}} \int_{\mathbb{R}^n} \left( \hat{f}(\xi) \cos t|\xi| + \hat{g}(\xi) \frac{\sin t|\xi|}{|\xi|} \right) e^{i\langle \xi, x \rangle} d\xi$$

3. 定理 4. の証明の概略

上式の  $u(x, t)$  が波動方程式初期値問題の解であることを示す。  $f, g \in S(\mathbb{R}^n)$  とし、解の公式の被積分関数を  $A(\xi, t)$  とおく。このとき、 $A(\xi, t)$  は各点  $t$  を固定するごとに  $\xi$  について可積分である。また、 $A(\xi, t)$  は各点  $\xi$  を固定するごとに  $t$  について  $C^2$  級である。さらに、以下のような  $\xi$  のみに依存する支配関数  $F(\xi)$  が存在する。

$$\left| \frac{\partial A(\xi, t)}{\partial t} \right| \leq |\xi| |\hat{f}(\xi)| + |\hat{g}(\xi)| = F(\xi)$$

ここで支配関数  $F(\xi)$  は  $\xi$  に関して可積分である。以上のことから、 $t$  についての微分と  $\xi$  についての積分の順序交換が可能であることがわかるので、

$$\frac{\partial^2 u}{\partial t^2}(x, t) = \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{n}{2}} \int_{\mathbb{R}^n} \left( -\hat{f}(\xi) \cos t|\xi| - \hat{g}(\xi) \frac{\sin t|\xi|}{|\xi|} \right) |\xi|^2 e^{i\langle \xi, x \rangle} d\xi$$

が得られる。同様にして、 $x$  についての微分と  $\xi$  についての積分の順序交換が可能であることがわかるので、

$$\Delta u(x, t) = \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{n}{2}} \int_{\mathbb{R}^n} \left( \hat{f}(\xi) \cos t|\xi| + \hat{g}(\xi) \frac{\sin t|\xi|}{|\xi|} \right) (-|\xi|^2) e^{i\langle \xi, x \rangle} d\xi$$

が得られる。よって  $u(x, t)$  は波動方程式の解である。また、 $u$  に対し、 $t = 0$  とすると  $u(x, 0) = f(x)$  となり、 $\frac{\partial u}{\partial t}$  に対し、 $t = 0$  とすると  $\frac{\partial u}{\partial t}(x, 0) = g(x)$  となることがわかる。したがって、導出した解の公式は、 $n$  次元波動方程式の初期値問題を満たすことがわかる。

ここで導出した解の公式は、与えられた関数に対して Fourier 変換が現れる。そこで、 $n = 3$  の場合に、Fourier 変換が現れない具体的な表式を紹介する。

4. 3 次元波動方程式の解の公式

$\mathbb{R}^3$  での極座標は、

$$x_1 = r \sin \theta \cos \varphi, x_2 = r \sin \theta \sin \varphi, x_3 = r \cos \theta$$

$$(0 \leq \theta \leq \pi, 0 \leq \varphi \leq 2\pi)$$

となるから、球面  $|x| = r$  上の面積要素を  $d\omega$  で表すと、

$$d\omega = r^2 \sin \theta d\theta d\varphi$$

となる。

**補題 5.**  $x, \xi \in \mathbb{R}^3, r \geq 0$  に対し、

$$\int_{|x|=r} e^{i\langle \xi, x \rangle} d\omega = 4\pi r \frac{\sin r|\xi|}{|\xi|}$$

**定理 6. 3 次元波動方程式の解の公式**

$f, g \in S(\mathbb{R}^3)$  とする。このとき、3 次元波動方程式の初期値問題の解は次のように表すことができる。

$$u(x, t) = \frac{\partial}{\partial t} \left( \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} f(x+y) d\omega_y \right) + \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} g(x+y) d\omega_y$$

5. 定理 6. の証明の概略

3 次元波動方程式

$$\left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{3}{2}} \int_{\mathbb{R}^3} \left( \hat{f}(\xi) \frac{\partial \sin t|\xi|}{\partial t} + \hat{g}(\xi) \frac{\sin t|\xi|}{|\xi|} \right) e^{i\langle \xi, x \rangle} d\xi$$

に対し、本稿では、 $\hat{g}(\xi)$  を含む項の計算のみ詳述する。

補題 5. より

$$\begin{aligned} & \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{3}{2}} \int_{\mathbb{R}^3} \hat{g}(\xi) \frac{\sin(t|\xi|)}{|\xi|} e^{i\langle \xi, x \rangle} d\xi \\ &= \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{3}{2}} \int_{\mathbb{R}^3} \hat{g}(\xi) \left( \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} e^{i\langle \xi, y \rangle} d\omega_y \right) e^{i\langle \xi, x \rangle} d\xi \\ &= \left(\frac{1}{2\pi}\right)^{\frac{3}{2}} \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} \int_{\mathbb{R}^3} \hat{g}(\xi) e^{i\langle \xi, x+y \rangle} d\xi d\omega_y \\ &= \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} g(x+y) d\omega_y \end{aligned}$$

$\hat{f}(\xi)$  を含む項も同様に計算すれば、3 次元波動方程式の一般解

$$u(x, t) = \frac{\partial}{\partial t} \left( \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} f(x+y) d\omega_y \right) + \frac{1}{4\pi t} \int_{|y|=t} g(x+y) d\omega_y$$

が得られる。

6. 参考文献

[1] 倉田和浩著、フーリエ解析の基礎と応用、数理工学社、(2020)  
 [2] 高橋陽一郎著、実関数とフーリエ変換、岩波書店、(2016)  
 [3] 黒田成俊著、関数解析、共立出版、(1980)